編集部発　海老沢秀夫

水力エネルギーが活躍 立ち登る煙が似合う杉線香の里

煙が立ち登っていた。ぱちぱちと枯れ草が燃える音、懐かしいにおい。老農夫が棒を片手に火を突っつき、田んぼの土手を焼いている。

茨城県石岡市八郷地区。2009年、朝日新聞と森林文化協会が全国から公募した「にほんの里100選」の里のひとつに選ばれた。同地区で5月下旬に予定している行事の下見を兼ね、石岡市八郷総合支所商工観光課の萩原三代子さんに案内してもらった。

杉と水と人の手で

八郷は果樹栽培が盛んだ。いちご、ぶどう、柿、梨……。どこへ行ってもビニールハウスと果樹園が目に入る。中でも目立つのは富有柿の畑。幹が3本、地際から扇形に広げられ、枝が整えられて兵隊みたいに行儀良く並んでいる。（写真）

柿の木の畑の向こうに筑波山がかすんで見える。八郷は、その東麓の農村地帯。まん中を、山の水を集めて北から南へ恋瀬川が流れ、霞ヶ浦に注ぐ。

「ぜひ見てほしいところがあるんです」。萩原さんが連れていってくれたのは、本誌の2010年1月号「にほんの里に住んでます」に登場した駒村道廣さんの家。筑波山のゆたかな沢水を利用して水車を回し、杉の葉を粉に搗いて線香を作っている。

外ではちょうど、原料にする杉の葉をむしっているところだった。葉はちくちく痛いほどよく乾いている。もちろん天然乾燥だ。秋から春先にかけて集めたものを小屋にストックしておいたものだ。最近は林業不振で伐採が少なく、近場で手に入りにくくなったのが悩みだという。「工事なんかで邪魔になって伐ったのをもらうこともある」そうだ。

水車小屋では木製歯車が回り、10本ほど木の杵が上下して杉の葉を搗いていた。2日ほど搗いてはふるいにかけ、パウダー状の粉にする。

杉の粉を湯で練って、トコロテンのように穴から押し出し、乾燥させると線香が出来る。水車小屋の隣では、線香を束ねる作業が行われていた。まったくの手作業だ。植物と、自然のエネルギーと人の手と。一見効率が悪そうだが、この組み合わせ、この循環する資源とエネルギーが基本だったから、駒村家の線香づくりも100年以上続いているのだろう。

共有資源の可能性は…

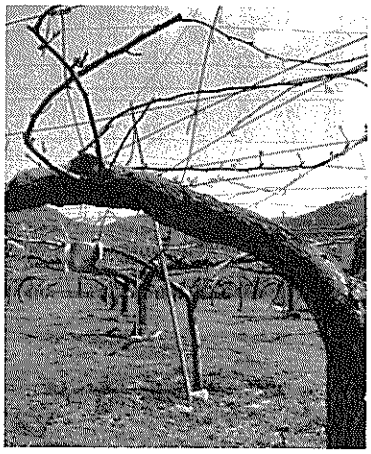
駒村さんの集落は一ノ沢という。名前にたがわず美しい沢が流れ下っている。かつては、この水を利用して米やうどん粉を挽く水車も回っていたという。

10軒ほどある集落の電気も水力発電でまかなっていた時期があったそうだ。当時の導水管も残っている。ぐるぐる回る水車を見ていると、導水管の下に小屋を掛け、水力タービンを設置すれば今でも発電できそうな気がした。水はまさに地域の共有資源。一ノ沢の水車風景に、最先端の未来風景が重なって見えた。

＊

地元の人が八郷の「桃源郷」と呼ぶ上青柳集落。茅葺き民家が2軒ある。八郷の茅葺き屋根は、茅、竹、杉の葉など里の資源を巧みに生かした意匠が特徴で、「筑波流」と呼ばれる。課題は茅と職人の確保。上青柳の茅場も地元だけでは維持できず荒れてしまった。「やさと茅葺き屋根保存会」が結成され、ボランティアも協力して茅の確保や職人の育成に取り組んでいる。

駒村さんは水車の課題も同じだという。「材料にする松がない。水車を作る職人の後継者もいない」。自然と人のかかわりで成り立っている里のシステムは今、循環型社会の可能性を秘めつつも、あやうい位置にある。



◇5月19日（土）、にほんの里100選「八郷」を歩きます。詳細は「協会だより」をご覧下さい。